



# 博物館だより

第76号

## 妖怪「袖引小僧」復元模型



「埼玉県西部では袖引小僧の怪を説く村が多い。時は夕方路を通ると後から袖を引く者がある。驚いて振り返ると誰もいない。歩き出すと又引かれる(川越地方郷土研究)」

この文は昭和13年(1938)から「民間伝承の会(1935年設立)」の機関紙『民間伝承』に発表された「妖怪名彙」という論文から引用したものです。著者は柳田國男。言わずと知れた日本民俗学の草分けの一人です。柳田は農商務省の役人で、東北地方の農山村の実態を調査しました。明治43年(1910)『遠野物語』が刊行されると、柳田のもとには各地から資料が集まるようになり、柳田はその研究に取り組みました。

『川越地方郷土研究』もその一つで、川越高等女学校(現在の埼玉県立川越女子高校)校友会郷土研究室が刊行しています。「袖引小僧」は、氷川神社宮司山田勝利氏による第4冊「伝説」に収められています。掲載内容については冒頭の文とほぼ同じですが、伝承された場所は比企郡中山村(現在の川島町中山)と記されており、柳田はこれを埼玉県西部として取り

上げたのです。

さて、現在私たちが知っている妖怪像の多くは水木しげる氏の作品に登場する妖怪といっても過言ではないでしょう。水木氏も袖引小僧の絵を描いていますが、袖引小僧については、江戸時代の資料には描かれた例がないため、水木氏の創作と推測できます。

当館では、今夏の企画展に際し、川越ゆかりの妖怪として、オリジナルの「袖引小僧」立体模型を制作しました。冒頭の「袖引小僧」の文章をアニメ等のキャラクターデザイナー・NOB-C氏のイメージで2次元化し、発泡スチロールアーティスト・ヤジマキミオ氏に3次元化していただきました。制作にあたっては、「KOWA・KAWAII」を合言葉に、イメージを共有して作業を進めました。完成した模型は写真のとおりですが、展示室の片隅で「ここだよ…」と語りかける「袖引小僧」はお子さんや若い女性たちを中心に好評をいただきました。

「袖引小僧」はこれからも折を見て、館内に出没しますので、見かけたら声を掛けてあげてください。

# 川越藩士の神隠し

— 安政五年皆川市郎平の一件から —

## はじめに

時は幕末。三浦半島に領地を持つ川越藩が、ペリーの浦賀来航の対応に追われた後、江戸湾の御台場の警備を担当している最中のことです。皆川市郎平という藩士が忽然と姿を消したのは、安政5年(1858)3月25日夜のことでした。

彼が再び川越町に現れたのは、同年5月12日。およそ50日のあいだ、鼠色の衣服を着た謎の男(連れの者)とともに、現在の静岡県沼津市を皮切りに、関東を中心に・山梨・静岡県、もっとも遠いところで香川県までを歩いたと言います。

この神隠しの記録をまとめたのは、入間郡赤尾村(坂戸市)名主林信海(1804~62)。赤尾村は当時川越藩領で、信海は頭取名主格を勤め、たびたび川越町を訪問していました。そこで得た情報を一書にまとめたのが、今回紹介する記録「神かくし中の記并評説」(写真1・以下記録1と表記)です\*1。信海は同じ記録を2つ作成し、この副本は、林信海の孫にあたる林織善が、昭和4年(1929)に日本民俗学の大家である柳田國男(1875~1962)へ寄贈しました(写真2・記録2)\*2。これらの記録をひもときながら、神隠しにあった川越藩士皆川市郎平の足跡をたどりましょう。

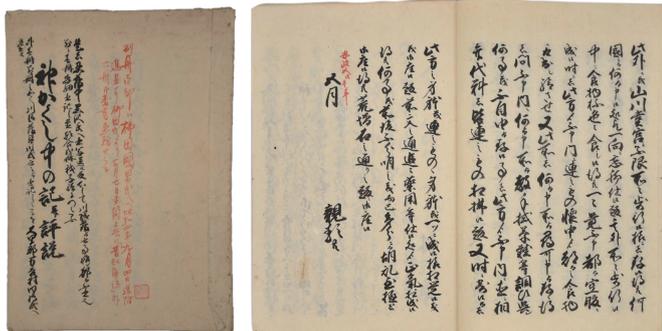
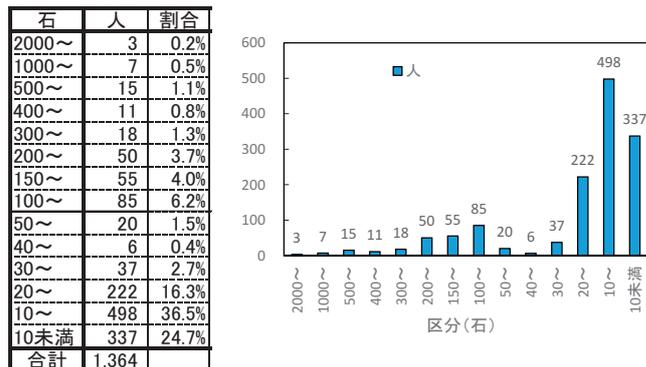


写真1 神かくし中の記并評説(林家蔵)

## 1 神隠しの概要

主人公である皆川市郎平は、川越藩士の一覧である分限帳から、嘉永5年(1852)当時、米20石取の藩士だとわかります\*3。川越藩から禄米を得ている1364人中、20石以上30石未満のものが222人おり、この皆川が川越藩の下級藩士に位置することがわかります(表1参照)。

表1 川越藩士の分布表・グラフ



川越城下の瀬尾町(中央小学校東側通り)にある皆川市郎平の屋敷に、惣髪で鼠色の衣服を着たわらじ履きの50歳過ぎの男が現れたのは、安政5年(1858)3月25日の夜でした。起きてこいと言われた市郎平は、縁側まで出たあと、気がついたら1水戸浜(現在の静岡県沼津市内浦三津、ゴシックの数字は表2に対応)にいました。ここを皮切りに、市郎平が覚えているだけでも、およそ40か所の地を回りました(表2参照)。

行き先の多くは、いわゆる神社仏閣の地です。関東地域が多く、最北は32日光山。神隠しというと天狗に連れられることが多いのですが、修験などの修行する山岳信仰の地というよりは、物見遊山のような場所を巡ったことがうかがえます\*4。

また、神隠しというと、その対象は子どもで、山の中で行方不明になるものも多く見られます。昭和元年(1926)に『山の人生』で神隠しの事例を紹介した柳田國

表2 皆川市郎平の訪問先

	地名	現在名と現在地		地名	現在名と現在地
1	水戸浜	静岡県沼津市内浦三津	22	郡内	山梨県都留郡
2	吉田之渡シ	同県沼津市	23	甲府	同県甲府市
3	沼津城	同市	24	身延山	同県身延町
4	広長寺	光長寺・同市	25	阿部川ミロク町	静岡市葵区弥勒町
5	箱根権現	神奈川県箱根町	26	遠州浜松	同県浜松市
6	小田原城下	同県小田原市	27	高麗金毘羅山	埼玉県日高市
7	馬入川	相模川・同県	28	高麗王墓所	同市
8	新田大明神	東京都大田区	29	平沢の滝	同県毛呂山町
9	浅草・上野	東京都台東区	30	常州銚子	千葉県銚子市
10	桶川不動	埼玉県桶川市	31	いたこ	茨城県潮来市
11	鴻巣山王	同県鴻巣市	32	日光山	栃木県日光市
12	平方之渡	同県上尾市平方	33	桐生	群馬県桐生市
13	北町金比羅	広濟寺・川越市喜多町	34	大まま	大間々・同県みどり市
14	奥沢九品仏	浄真時・東京都世田谷区	35	本庄宿	埼玉県本庄市
15	池上本門寺	東京都大田区	36	讚州象頭山	金刀比羅神社・香川県琴平町
16	堀之内妙本寺	東京都杉並区	37	八王子	東京都八王子市
17	川崎大師	神奈川県川崎市	38	鎌倉八幡宮	神奈川県鎌倉市
18	道灌山	東京都荒川区	39	円覚寺・建長寺	同市
19	高井戸	東京都杉並区	40	藤沢遊行寺	同県藤沢市
20	田無	東京都西東京市	41	大磯虎ヶ石	同県大磯町
21	府中六所権現	大國魂神社・東京都府中市	42	渡辺洛平方	川越市宮下町

男は、みずからも幼少期に神隠しにあったことを記しています\*5。そのような意味から、自宅にいながら神隠しにあった成人である皆川市郎平の事例は稀有な例と言えます。

これらの地は徒歩で回ったものが多いのですが、その順番は行ったり戻ったりと、単に歩いたとは思えないものです。例えば41大磯の虎ヶ石では、「夫より先不分明ニ而暗キ道を数十里歩行」と、先の見えない暗い道を数十里歩いています。また、7馬入川(相模川)を渡った時は、「是者舟ニ者無之、水之上ヲ渡り候様相覚」と、舟でなく水の上を渡ったとあり、その歩みは異界を歩くかのようです。

食事についても興味深い記事があります。例えば、1水戸浜の場面では、「大き成魚ヲ調ヒ引裂キ候而、連之男と共ニ食シ」とあります。副本の記録2では「右魚ハ鰯」と書かれてあり、連れの者と一緒にブリを食べたことがわかります。また4広長寺では、寺の拝殿のような場所で、連れの者と「結ひ飯ヲ給候様相覚」と、おむすびを食べたと記憶しています。

ただ、この場面以外に何を食べたのかははっきりと覚えていませんが、市郎平が空腹を感じると口には出さずとも、すぐに連れの者が懐ろから食事を取りだしてくれたことは覚えていました(「都而空腹ニ成候時ニ者、此方より不申内ニ連之もの懐中より都而之食物取出シ給サセ」)。

これは何も食事だけに限りません。連れの者は手ぬぐいや草履なども調達しています。2吉田の渡しでは舟賃を支払うなど、代金はすべて連れの者が支払いました。それは、市郎平が不自由さを感じると即座に連れの者が用意したほどでした。そのためか、自分の体が連れの者と「一ツニ成候様相覚候義茂御座候趣」と、まるで二人が一体であるかのようにであったと告白しています。

市郎平が川越に戻ってきたのは5月12日の夜。そこは川越藩士の渡辺洛平の屋敷でした\*6。この渡辺氏は市郎平の「御内方様御生家」(妻の実家)で、宮下町に屋敷がありました\*7。

## 2 林信海による評説

林信海が記したこの記録1は、最初に皆川市郎平の神隠しの部分と、その後半に「評説」と題して、それぞれの記事について、信海が疑問や不審に思うことを記しています。その意味で単なる記録とは一線を画します。以下、信海が指摘した部分を挙げましょう。

### ①武士なのに刀は…

まずは一番最初の場面について。鼠色の衣服を着たおよそ50歳の「男」が、皆川市郎平を迎えに来て出たときに、「脇差手に持てとか、さしてとか、必かくへき所なるをや、あるハ手にとり持、あるハ腰にさす事、武士の平常也…」、武士であれば脇差を手につつかさすとか、必ず刀を携えるはずなのに、その記載がない点を信

海は不審に感じます。

そもそも武士たるものが、見た事のない者が夜中に草履のままで寝所へ来ているのに、全く怪しいとも思わないどころか、脇差すらも差さず起きて縁側まで出た部分を注目しています。このことだけでも、皆川が「奇事」にあった意味を考えるべきで、その趣旨を深く検討すべき(「味ふべし」と述べています。

身分制社会である江戸時代において、その支配者たることを指し示す刀について、言及がない点を信海は力説するとともに、このような神隠しに遭遇した驚きを禁じ得ないことがうかがえる部分です。

## ②沼津藩主水野忠良の「死」

次は、3沼津城に来たときの場面です。この部分は信海が評説で述べた部分ではありませんが、連れの者の性格を見る上で重要な記述と思われま

す。記録1では、沼津城を見た連れの者は、城中から「不浄之氣」が立ち上っているの

で、「是者城主廿六歳ニ成候処、此度卒去ニ而未タ発シニ者不相成候義与存」(城主は26歳の若者だが、既に亡くなっている。しかし、いまだ幕府へ公表していないのではないかと思う)と述べております。

当時の沼津藩主は水野出羽守忠良で、記録によれば同年5月3日に死去しています。副本の記録2によれば、<sup>なおよし</sup>参勤交代で江戸から川越に戻った藩主松平直侯が、同年5月19日皆川市郎平の神隠しの記録を見て、確認のため沼津へ人を派遣したうわさが立っていたようです。「五月十九日御帰城御殿様御覧被成候而、沼津へ人被遣、水野侯卒去之事実、御調被成候由風聞有之」写真2・朱書部分)\*8。

藩主が死去したにもかかわらず、それを伏せて養子願を出し、その願が認められた後に、死去を報告することは、江戸時代の武家社会ではよく行われた慣習でした。それを見抜いた連れの者が、このような不思議な能力を持っていたことを示す部分でもあります。



写真2 諸国叢書(成城大学民俗研究所蔵)

## ③連れの者とは…

最後に、この神隠しの記録でもっとも気になるのは、同行した連れの正体でしょう。先述のように、市郎平が欲しいと思うものを念じれば、ただちに食事などを懐中から取り出した連れの者は、明らかにこの世の人とは思えません。

この行程では、例えば36象頭山(金刀毘羅宮)を歩いた時には、「海を下ニ見下シ、虚空ヲ行候様相見…讚州象頭山へ参り」と、空の上を歩き、金刀毘羅宮へ到着したとあります。その後、「生くさき寒風」が吹くところを数十里行き、富士山を北に見ながら37八王子に着いたと記されています。この部分について、4月末~5月始め(現在の6月頃)は、本来であれば暖かい風が吹く頃なのにと信海は疑問を呈しています。この世ではないどこかを通過したのではないかと、彼は理解しているようです。

また、41大磯虎ヶ岩から42川越・渡辺洛平宅へ帰る時、大磯から先の見えない道を数十里歩いて、川越の渡辺邸に帰ってきた部分を以下のように記しています。それは、神隠しにあった最初の夜は水戸浜に着くまで記憶がなかったのに、大磯から川越まで歩いて行ったことを覚えているのは、それは市郎平を誘い出した神の業であろうと、信海は記しています。すなわち、信海は連れの正体を神であると理解していました。

そして、「すへての事とも此世の人の物するとハたかひて、いとあやしきことのミ也」と、すべての事が現世のものとは違って、非常に不思議なことだらけとして、行きつ戻りつこの行程が、まるで子どもの戯れのようだと驚いています。続いて、「何等のために此世の人を、さる神のともなひさる事をさせ給ふにか」、何のために神はこのようなことをされるのか、どう考えても不可思議であると、信海の理解を越える神の行動に驚くばかりです。

## 3 神隠し情報の入手先

林信海は「神かくし中の記并評説」に記した情報を、どのようにして入手したのでしょうか。記録1では、「我里人某彼皆川氏に縁ありて、はやくより往来しつれハ、まのあたりあひ見ること、とハせもして聞きつることもある也」と記され、信海と同じ赤尾村の某氏が皆川氏に縁があって、皆川市郎平が神隠しから戻って来たただちに見聞したことがわかります。この部分については、彼の公用日記である「役用向諸記録」(写真3)で詳細に記されています。

安政5年5月16日条には、早くも市郎平の神隠しの記



写真3 役用向諸記録  
(埼玉県立文書館収蔵林家文書1819)

側通り)の自宅に戻ってきた逸話を紹介しています\*10。この話は、この皆川市郎平の話が元になり、人から人へと伝えられるなかで、市郎平が市太郎へ、瀬尾町が鉦打町(隣町)へ、およそ50日が3年へと、変わっていった様子うかがえます。

昭和4年(1929)、柳田にこの神隠

しの書を送った林織善は、同封した手紙のなかに「当時川越にてハ稀有の事件らしく、今猶この事を申伝える古老有之候程に御座候」と、事件から70年たった今でも覚えている古老がいるほどと記しています。この話がいかにか人口に膾炙したかが明らかになると同時に、文字ではなく口頭で伝達された当時の社会の様子うかがい知れます。

林信海は記録1の最後に「かく賤しき神すらかゝる事のある我神国の行末いともたのしからすやは」と、神がいわゆる神隠しをするような我が神国の将来は安泰ではないかと結んでいます。現代社会において、神隠しは荒唐無稽なものです。江戸時代の人々が神や自分の知らない世界について、畏怖した畏敬の念をもって接していた様子うかがえます。

(学芸担当 宮原一郎)

述が見られます。彼が川越に戻ってきたのは同月12日夜のことですから、すぐさま信海の情報網に飛び込んできたようです。この情報源は信海と同じ赤尾村に住む金右衛門でした。彼は皆川家へ三年の間奉公に出ていました。

5月19日に川越藩主松平直侯が江戸から川越へ戻るのに合わせて、皆川家では市郎平の話や聞いたことを巻物にまとめて、殿様の上覧に備えていました。皆川家で作成された記録のことを知った金右衛門は、かねがね林信海がこのような情報を好んでいたことを思い出し、市郎平に断ってその写しを取り、信海へ渡したことが記されています。

以上より、この記録は皆川家が藩主へ上呈する報告書そのものか、それにほぼ近い写しだとわかります。そのため、記録1の神隠しの部分の最後に「親類共」と書かれたことも納得がいきます(写真1参照)。

つまり、信海が川越城下で聞き及んだ単なる風聞などではなく、藩主に報告するような非常に信頼できる筋からの情報であることが明らかになります。

そのためか、皆川家にとって不都合な情報など、信海の日記にあって記録1にはない情報も見られます。例えば、皆川家の先代は馬術が得意であったため、小役人から登用されたこと。しかし、その子である市郎平は病気で引き籠もり(「御引籠」)であったことなどが記されています\*9。

### おわりに

川越藩士の神隠しについて、川越郷土史の先駆者である岸伝平氏は、「天狗の神隠しか」との題名で、川越藩松平大和守家の家臣皆川市太郎が、山伏姿の天狗にさらわれて、三年目にして鉦打町(中原町小杉齒科前の北

### [註]

- \*1 坂戸市・林信行氏所蔵。指摘のない限りこの史料から引用。
- \*2 「川越御藩中皆川市郎平様四十五日之内神かくしニ御成り中御党分御親類様方御聞書之写」(成城大学民俗学研究所蔵)。この史料は『諸国叢書』第19輯(同研究所、2003年)に史料が影印で掲載されている。
- \*3 嘉永5年(1852)「子給帳」『川越市史 史料編 近世I』。表1の藩士のデータ集計・作表は、武藤材治氏による。
- \*4 江戸時代後期の国学者である平田篤胤は、天狗に連れられた寅吉が体験した異界の情報を『仙境異聞』として、文政5年(1822)にまとめた。この異界とはすなわち山人の世界であった。『仙境異聞・勝五郎再生記聞』(岩波文庫、2000年)。
- \*5 柳田国男『遠野物語・山の人生』(岩波文庫、1976年)。
- \*6 天保4年(1833)「已給帳」(川越藩士の分限帳。『川越市史 史料編 近世I』497頁)には、江戸詰の高150石の藩士として渡辺洛平が記載されている。
- \*7 埼玉県立文書館収蔵林家文書No.1918、嘉永3年(1850)「役用向諸記録」。
- \*8 註2参照。
- \*9 この他、沼津藩主水野出羽守の死去や、川越への帰りに大井宿で逢った藩士に声をかけようとしたところ、連れの者に白目でにらまれ口をつぐんだことなど、記録1にはない記述が見られ興味深い。
- \*10 岸伝平『川越閑話 川越叢書第一巻』(川越叢書刊行会、1954年)31~32頁。

# 蔵造りの町並み模型制作物語

— 25年目にして語る その1 —

## 1 はじめに

今年、川越市立博物館が開館してから25年を迎えました。そこで、今回と次回にわたり、蔵造りの町並み模型の制作にまつわる話を取り上げます。

現代の川越を特徴付けている歴史的資産、蔵造りの町並み。関東大震災(大正12年：1923)以前の東京を彷彿させる町として、昭和初期には既に知られていました。

その後、商店街として悲哀を味わいましたが、今では国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、多くの観光客を集めています。ちょうど、建物を覆い隠していた看板の撤去が始まりだした昭和の終わり頃、博物館の構想が練られました。近世から近代、そして蔵造りの構造というように、現代の町並みに繋がる展示です。

この町並みの盛時はどうだったのか。模型だけでも、再現してみたいくなるのは当然のことですね。

なお、本文では、旧町名を使っています。

## 2 設計の話

### ① 設計者の話

博物館の模型は、展示業者に一括発注し、その一部として制作されることが多々あります。しかし、この模型は、設計と製作を分離発注し、さらに、制作途中の監理も行いました。

設計の委託先は、東洋大学の工業技術研究所です。当時工学部教授でいらした太田邦夫先生に窓口になっていただきました。

委託金額は680万円、委託期間は、昭和63年5月28日から9月30日までというわずか4ヶ月しかありません。

設計する敷地数は、135軒。その内調査図面があるものわずか19軒。しかも、すべてが揃っている訳ではありません。

実質的に設計に携わったのは、羽生修二氏(当時東洋大学非常勤講師)、山田幸正氏(当時東京都立大学助手)、遠藤一善氏(当時東洋大学助手)、そして荒牧です。羽生氏は、昭和56年の市指定文化財調査において中心的役割を果たし、遠藤氏はその下で実測調査をこなしていました。また、山田氏も学生時代から民家町屋の実測調査を行い、川越でも、実績がありました。当時最年長の羽生氏でさえ40歳。若手だけで作業を進めました。

### ② 敷地の話

はじめの課題は、模型の範囲です。博物館側からの提示はありましたが、敷地の奥行きはどこまでか、どの建物までを表現するかなど総合的に検討し直しました。

北は、町の起点とも言べき札の辻、南側は志義町の丁字路(現仲町交差点)までです。幅は、南町の屋敷地の建物配置がわかる範囲としました。横の通りである本町、高沢町、志義町、多賀町は、模型の台座の幅としました。また、志義町の南側以外は、建物が中途半端に切られないことを前提にしています。そのため周囲には、建物を建てていない所ができました。

次は、年代設定です。明治35年(1902)から40年ぐらいの間としました。これは、「埼玉県営業便覧(明治35年)」に店名と商いが通りの並びに沿って記載されていること。大正7年(1918)に建てられた八十五銀行の旧状を示したかったこと。「菅間正作(現F GALLERY)」のレンガ蔵を表現したかったことからです。

ここから、ベースとなる地図作りにかかります。2,500分の1の都市計画の白図や市の台帳用に作られた500分の1の地図をベースに、模型と同サイズの100分の1まで拡大し、さらに公図と照らし合わせながら敷地形状を確定していきました。

仕上げは現地調査。人々が活動を始める前の午前4時

頃から、一番街の道路幅や境界の位置を調査しました。伝統的な建物では、隣地境界や道路から柱がどの位置にあるかなども調べ、先ほどの図面に落とし込んでいきました。早朝の調査は、交通量が少ないこともさることながら、あらぬ疑いをかけられないためです。

### ③ 建物の設計の話

いよいよ建物の設計です。図面を書いたのは、東洋大と都立大の学生約30名。私たち4人は、図面化に必要なスケッチの作成です。夏休み、当時世田谷区深沢にあった都立大学工学部の学生製図室に籠りました。

建物を推定する上で資料としたのは、実測図が掲載されている「伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書蔵造りの町並み(昭和51年)」「蔵-暮らしを守る 東京海上創業100周年記念出版(昭和54年)」「川越市指定文化財調査報告書 川越の蔵造り(昭和57年)」「川越一番街活性化モデル事業調査(コミュニティマート構想モデル事業調査)(昭和61年)」。写真等は、国書刊行会「ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 川越」や「川越町勉強商家案内壽語録(明治34年)」「川越町商家案内壽語録(明治42年)」と川越市立図書館所蔵の郷土資料関係刊行物です。また、建物の輪郭とその外周の長さを記した公文書も見ることができました。

明治16年(1883)の「徴発物件書類家屋取調書」も活用しました。時代は少し遡りますが、この資料には多くの間取りが記載されており、間取りを考察する上で参考にしました。「埼玉懸営業便覧」は、商いがわかることから、店内の間取りを想定することができました。

外観は、既存建物と古写真からの推定です。写真に写るシルエットや濃淡、影の状態と現存の建物を比較し、決定していきました。

屋根の形は、国土地理院や米軍が撮影した航空写真等を参考にしました。

これらの考察を積み重ねた結果、表通りに面する建物で、同じ物は一つとしてありません。

仕上がった成果品は、全体配置図1枚、模型と同寸法の100分の1配置図4枚(1枚に収まらないので4分割されました)、100分の1建物図面325枚という膨大なものとなりました。建物図面は、1棟ごとに各階平面図、各屋根の伏図、東西南北すべての面の立面図からなっています。

これには、店や住居だけではなく、土蔵はもちろん、外便所や稲荷等すべての棟の図面が作成されました。もっとも、ごく一部の土蔵や外便所、稲荷社は同じ図面を採用したものもあります。

なお、小型の稲荷社は、拙宅のものを採用しました。昭和56年に建て替えたものですが、以前のものと同寸にて再現したものです。いつ頃勧請されたか不明ですが、扁額と狐の置物に明治28年初午と記されています。



小規模稲荷の例  
拙宅の稲荷社と模型

この一連の作業は、単なる模型のための図面作成ですが、川越の町並みの復元研究になったといっても過言ではないでしょう。

(教育普及担当 荒牧澄多)

## Information

平成27年度の博物館行事です。(3月まで)  
**展覧会・講座・教室 etc**

●…一般向け事業 開催日・講座名  
○…子ども向け事業 内容・申込開始日

1月	○9(土) 子ども体験教室 まゆ玉飾りを作ろう 12/4	○16(土) 子ども体験教室 土笛・土鈴作り 1/6	●30(土) 縄文土器作り教室 1/8
	← 16日(土)~第26回 「むかしの勉強・むかしの遊び」展		
2月	~ 28日(日) 第26回 「むかしの勉強・むかしの遊び」展 →		
	○13(土) 子ども体験教室 昔の道具を使ってみよう 申込不要	○20(土) 子ども体験教室 昔の道具を使ってみよう 申込不要	
●7・14・21(日) 博物館歴史講座 川越の古代 1/7			
3月	← 26日(土)~第25回 収蔵品展		
	○5(土) 子ども博物館教室 昔の織物に挑戦 2/2	○12(土) 子ども体験教室 和紙作りに挑戦 3/2	○19(土) 子ども体験教室 わら細工に挑戦 3/3

\*変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。お問い合わせは博物館まで。

# 第26回 むかしの勉強・むかしの遊び展

会期：平成28年1月16日(土)～2月28日(日)

毎年恒例の「むかしの勉強・むかしの遊び展」の季節がやってきました。この展示は、当館の収蔵資料から地域の人々の暮らしの移り変わりをたどる展示です。昭和30～40年代を中心に教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を再現し、むかしの勉強を支えた教科書や文房具、遊びを彩ったブリキのおもちゃや熱中したペーゴマなどを展示します。また今回の展示では当時最新だった電化製品を展示しますので、豊かな暮らしのアクセントを味わっていただければと思います。

この展示を通して、大人が子どもに当時の思い出を語れるような場となれば幸いです。みなさまのご来館をお待ちしております。



昭和30～40年代の家具調アンサンブルステレオ  
Victor Hi-Fi Stereo Audiola

## 利用の御案内

### ◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り 資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館 ●まつり 会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※( )内料金は、団体(20名以上、1名につき)の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)

第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月29日～1月3日)

館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

\*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

### ●ガイド

○博物館▶平日(開館日)午前11時・午後2時

土・日・祝日 午前11時・午後1時・午後2時・午後3時

※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

○川越城本丸御殿(市民ボランティア)▶原則毎月第3日曜日 午前11時・午後2時

※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

○川越市蔵造り資料館(市民ボランティア)▶原則毎月第2日曜日 午前11時・午後2時

※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

### ●機織り実演・体験(協力：博物館同好会)

○博物館 毎週火・水曜日▶午後1時～3時 華の会(裂き織り)

毎週木・土・日曜日▶午前10時～午後3時(12時～1時はお休み) 川越唐棧手織りの会

※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

平成27年 12月

日	月	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

平成28年 1月

日	月	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

2月

日	月	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29					

3月

日	月	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

●印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿)

●印は、2館休館(博物館、本丸御殿)

●印は、1館休館(博物館)

### ◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅よりまたは西武新宿線 本川越駅より、

●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分

●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



### 博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。随時最新の情報等を配信します。※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。



発行日●平成27年12月8日 発行●川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1  
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

TEL049-222-5399 FAX049-222-5396  
ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/